

---

# ロボット

秋島キサト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロボット

### 【Nコード】

N8465G

### 【作者名】

秋島キサト

### 【あらすじ】

お母さんはわたしに言った。「あなたはロボットなのよ」と。その言葉に納得したわたしは、ロボットとして日々を送っていたけれど……。

ある日、お母さんにこう訊いてみた。

「お母さん、わたしってなんなの？」

お母さんはびつくりした顔をして、どうして？と聞き返した。

「クラスみんなが、わたしのことをおかしいって言ってる。人間じゃないって。ねえ、お母さん、わたしってなんなの？」

お母さんは急に悲しそうな顔をして、わたしを古ぼけたちゃぶ台の正面に正座させた。それから、弱々しい電球の下、真面目な顔で言った。

「いい、落ち着いて聞いてね。あなたはみんなの言う通り、人間じゃないの。機械なのよ。ロボットなの。だから、みんながそう言うのは当たり前なのよ。今まで隠していてごめんなさいね」

それで、わたしは納得した。わたしがロボットなら、何も不思議なことはない。みんな当たり前のことをいったただけだ。今まであまりお風呂に入らなかったのも、わたしがロボットだからだろう。

翌日、学校に行くと、やっぱりみんなはわたしに言った。

「きもいんだよ、この貧乏神！」

「お前なんか人間じゃねーよ、死ね！」

みんなは変なことを言うなあ、とわたしは思った。わたしはロボットなんだから、貧乏神なんかじゃないし、人間でないのは当たり前だ。それを改めて言う必要はまるでない。それに、きもい、だなんて、ロボットに対して気持ち悪いと言うのもよく解らなかった。人間と同じ形をしているロボットの、どこが気持ち悪いのだろう。そしてその上、死ね、だって？生き物じゃあるまいし、ロボットなら「壊れる！」が妥当だろう。みんなは日本語を間違えている。

わたしがそれらのことを指摘すると、みんなはあ？という顔を

「バカじゃねーの？」

「こいつとうとう頭がイカレたか」

「もう相手にしてらんねーよ！」

その日から、みんなはわたしに話しかけなくなった。わたしも別にみんなのことが好きではなかったたので、いつも通り毎日を過ごした。

ある日、家庭訪問があった。担任の先生がうちに来て、家の中でお母さんと話していた。わたしの家には部屋が一つしかないのので、仕方なくわたしはアパートの通路に出て、戸の前でそれを聞いていた。先生が言った。

「xxちゃん、最近、そのう、自分のことをロボットだと公言しているようなんですが……お母さん、何か心当たりはありませんか？」

お母さんは、ふう、とため息を吐いて、ちょっと疲れたように答えた。

「心当たりも何も、あの子に事実を教えたまでです。あの子はロボットです。間違いありません」

先生はその後、困った様子であれこれ言っていたけれど、やがて時間が来て家から出てきた。帰り際、わたしが通路で見送っていると、先生は振り返って、哀れむような目でこう言った。

「頑張つてね」

わたしは何を頑張るのかよく分からなかったけれど、うん、とりあえず頷いた。

わたしはロボットだったけど、ご飯は食べないといけなかった。でも、食べるのは学校の給食だけで、家で何かを食べることはほとんどなかった。お母さんは朝、昼、晩と食べるけど、多分それはお母さんが人間だからだろう。お母さんは、わたしが給食の残りをこっそり持って帰ってくると喜んだ。

ある夜、お母さんが夕食を摂っている横で、何もしていないわたしはこう尋ねた。

「お母さん。わたしはロボットで、お母さんは人間。お母さんはわたしのお母さんなの？」

給食のレーズンパンを食べながら、お母さんはちよつと困った顔をして、それから深くうなずいた。

「あなたを作ったのは、お母さんなの。だから、お母さんはあなたのお母さんよ」

なるほど、とわたしは簡単に納得した。お母さんが機械をいじっているところなんて見たことがなかったので、そんなことが出来るんだと少し感動もした。

ある日、蛇口をひねっても水が出てこなくなった。どうしてかとお母さんにお母さんに聞くと、

「あなたはロボットだから、水なんて必要ないのよ」と言った。なるほど、と思った。

ある日、ガスコンロがつかなくなった。どうしてかとお母さんに聞くと、

「あなたはロボットだから、家で食事を取らないでしょう。だから、火を使う必要はないの。お母さんも、使わないわ」

と言った。なるほど、と思った。お母さんは給食の残りだけを食べていた。

ある日、部屋の電気がつかなくなった。どうしてかとお母さんに聞くと、

「あなたはロボットだから、何も見なくて平気なの。でも、手元が暗いと宿題が出来ないでしょうから、これを使おうね」

と言って、ろうそくを一本ちゃぶ台に置いた。なるほど、と思つてろうそくの傍で宿題をした。

ある日、学校から帰ってくると、家の戸の前に黒い服を着たおじさんが二人いた。おじさんたちは、今にも壊れそうな木の戸をがん叩いて、家の中に向かって何か怒鳴っていた。大きくて低い声で、わたしは一瞬怖くなっただけ、ロボットであるわたしに怖いものなんて何もない、と思い、おじさんたちにどいてくださいと言った。ひげを生やした目つきの悪いおじさんが、わたしを睨みつけると、つま先でわたしのおなかを蹴り飛ばした。わたしは薄汚い通路に吹っ飛んだ。おなかのあたりが熱くなって、喉の奥から何かがこみ上げてくる感じがしたけれど、多分どこかしら壊れたんだろう。わたしは動けなくなっただけ、お母さんが直してくれる。そう思っただけで倒れたままになっていて、家の中からお母さんが飛び出してきた。おじさんたちの足下に額をこすらせて土下座した。おじさんたちはさんざんお母さんの頭を踏んづけて、何かひどい言葉を浴びせていたけれど、お母さんはひたすら地面に額をこすりつけていた。

やがて、二人のおじさんは帰っていった。お母さんはすぐに頭を上げて、まだ倒れていたわたしのところへ飛んできた。お母さん、壊れちゃった、直して。わたしがそう言っていると、お母さんは汚い地面に膝をついて、ごめんね、ごめんねとわたしに抱きついた。土で汚れたお母さんの頬に、涙の跡がくつきりついた。

お母さんは、細い腕でわたしを抱えて、家の中に入った。夕方、部屋の中が真っ赤に染まっていた。真っ赤な床で仰向けになったわたしは、真っ赤に染まったお母さんの頬を見ていた。目元だけやけに光っていた。

お母さん、これから××のこと直してあげるからね。そう言ってお母さんはわたしの傍に膝をついた。わたしはうなずいて、じっとお母さんの顔を見た。とても優しく微笑んでいて、さっきまでのおじさんたちに踏まれていたお母さんの面影はなかった。

ありがとう、お母さん。そう言っていると、お母さんははっとしたように顔を逸らし、目元を押さえた。どうしたの？と訊くと、なんでも

ないのよ、と言ってまた振り向いて笑った。

じゃあ、目を閉じていてね。お母さんが言うので、わたしは言われた通りにした。

首筋に、お母さんの両手がそつと当てられる。指先がびっくりするほど冷たくて、カサカサしていて、わたしは思わず目を開けそうになったけれど、お母さんの言いつけを護るためにこらえた。

お母さんは、全部の指に力を入れたり抜いたり、それを何回も繰り返していた。そのたびにわたしは息が苦しくなっていたけれど、お母さんはわたしを直してくれているんだと思い、我慢した。

部屋の中はとても静かで、お母さんの呼吸すら聞こえない。

不意に、指の力が今までよりずっと強くなる。わたしはすごく苦しくなっていたけれど、お母さんはわたしを直してくれているんだと思い、がまんした。親指の爪が、喉の出っ張った部分に食い込んで、痛い。わたしは口ボツトなんだから、痛みなんて感じないはずだ。だからこれは、痛みとは別の何かなんだ。わたしはそう思ってたがまんした。そのうちに、目の前が真っ赤になった。目を閉じていても夕焼けが見えるようになったのだ。お母さんはやっぱりわたしを直してくれているんだ。そう思うと、手足の力が抜けた。それから一言、ありがとうとつぶやこうとしたけれど、こういうわけか声が出なかった。

「ごめんね……ごめんね……」

代わりに、お母さんがそう繰り返す。わたしがお礼を言おうとしているのに、お母さんが謝るなんておかしいことだ。

そのうちその声も聞こえなくなって、夕焼けは遠のいていった。

「母親の方は首吊り自殺ですね。娘の方は……絞殺です。母親が殺したんでしょう」

「借金に追われて無理心中、か……ありがちな」

「ええ……でも変じゃないですか？この子」

「何がだ？」

「抵抗した痕が、全くありませんよ……」



## （後書き）

大分久々の投稿になります。これからまたちよくちよく書くつもりです。読んでみてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8465g/>

---

ロボット

2010年10月8日14時13分発行